



内橋克人氏が神戸の人で神戸新聞の記者が出発点だったことを知ったのはずっと後年ですが、其の時々目にする評論やラジオから流れる言葉一つ一つにうなずき、楽しみだった。

毎朝6時40分NHK ラジオのニュース番組▽マイ! Bizにスイッチを入れ、今日の出演者は???と。

内橋克人氏の評論が聞けると其の日はラッキー。 ラジオから流れる一つ一つの静かな言葉に頷くのが楽しみでした。

私のホームページの「神戸便り From Kobe」にも勝手にながら、何度も登場してもらって紹介してきました。

いま 振り返ると高度成長期から現在まで、悩んだときの道しるべ 随分世話になってるなあ・・・。

やさしさがほとばしる新聞に掲載された写真のお姿 ほんとうにありがとう

はただ安らかに天国で憩われますよう 合掌

2021.9.5. From Kobe Mutsu Nakanishi

内橋克人さん死去

# 人重視の経済に信念

【評伝】市場原理主義に警鐘

「今日明日をな入りの営みが残りのあり、その営みは、存在のものと深い関係、いつまでも消えぬもの、個性豊か、思ひ込め、いつづける」(其生の手紙)。1日、89歳となった経済評論家、内橋克人さんの60年に及ぶジャーナリスト活動の経路を辿っていったのは、市井の人々の温かさを覚えた。

12歳で神戸空襲を遭い、さきを離したという。戦時下の下を逃げ移った。7年、フリーとして独立。1979年、神戸新聞の経済記者として入社。経済記者として多くの時代は、経済多岐の文筆活動をした。神戸新聞の取材打ちは中々細い。ある休日に、神戸新聞の編集長が、中切民故(故人)の熱意に感銘を受けた。その熱意に感銘を受けた。神戸新聞の編集長が、中切民故(故人)の熱意に感銘を受けた。神戸新聞の編集長が、中切民故(故人)の熱意に感銘を受けた。

神戸新聞の経済記者時代の内橋克人さん=1964年

神戸新聞の経済記者時代の内橋克人さん=1964年

神戸新聞の経済記者時代の内橋克人さん=1964年

7月16日早朝 NHKラジオ朝一番 ビジネス展望

### 『働き方の多様化とは何か』内橋克人 2013.7.16.

内橋克人さんのビジネス解説 実に明快分かりやすい解説に私には一番すっと入ってくる話になるほどと。

- ◎ 多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う
- ◎ 正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。「日本ではこれが、ごっちゃにされて 都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバル スタンダードが非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、(決してそんなことはない)」と欧米の具体的な事例をひいて言う。

- ◎ 例えば、『オランダモデル』の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。均等待遇の上立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の2種類しか労働は存在しない。

前記の文を書きながら、私のホームページ「和鉄の道・Iron Road -神戸便り from Kobe」に掲載紹介してきた内橋克人氏の記事をもう一度読み返しました。  
 今も変わらぬ輝きのある内橋克人氏の評論・言葉。  
 バラバラに掲載していましたので、主要記事をリストアップ。  
 このコロナ禍の中 時代が大きく変わろうとしている日本の社会・経済  
 みなさまにとっても参考になればとリストアップしました。

**和鉄の道・Iron Road - 2012年の初めにより 内橋克人氏「100年後へのメッセージ」**

<https://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf>

**《内橋克人氏の提案する自立自給経済の創生》**

【from Kobe 2012. 1. 1. <http://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf> より】

被災地だけでなく 日本の疲弊がますます露わに 人間復興・社会基盤の復興の両立を  
**「日本人気質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して 新しい日本作りに踏み出そう**  
 もう 気がつこう マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ  
 国際マネー主義から脱して 市場主語から人間主語へ

2011年12月18日 NHK BS 内橋克人 100年インタビューより

賢さをともなった勇気を持って 頂点同調主義から脱出 市場主義から人間主語へ  
 矛盾を解決することで成長を生む「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済の創生

2011年12月 NHK BS 「内橋克人 100年インタビュー」

1. 1900年代後半以降 国際競争・市場主義と規制緩和 が「働く」をどう変えたか  
 国際マネー資本主義経済に翻弄される日本が浮き彫りに  
 激的な競争の導入と格差の増大 企業・金融は国家を覆えてゆく  
 富強と国民生活の乖離



戦後 日本が歩んだ道 NHK BS 2011.12.18 「内橋克人 100年インタビュー」より

- 戦中時代の反省 戦中・戦後 そして 今も続く社会構成員の原点 日本人気質
  - 頂点同調主義
  - 熱狂的な等質化現象 リーダーにゆだねる・真を捨てる
- 1960年代 高速経済成長 頂点同調主義・等質化の中で図説した高速成長
  - 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上
  - 公害ほかの矛盾に重畳した成長
    - ・ 生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発 独創性のなさが弱点
    - ・ 基礎技術・革新技術開発の遅れ

世界一の技術立国日本の傑出 中 真を奪えられぬ日本の社会
- 1970年代後半 石油ショックによる原油価格の急騰 「狂乱相場」とインフレ・構造不況へ突入
  - 1974 第一次石油ショック・中東戦争 ・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト
  - 1979 第二次石油ショック・イラン革命 ・厳しい国際競争にさらされる
- 1985年～2000年 バブル経済とその終焉 下位劣質のための規制緩和と大企業金融主義の時代
  - 1980～ バブル暴走 マネー資本主義の時代へ
  - アメリカ型資本主義 株値至上主義
  - 1991 バブルの崩壊
- 1990年代～ 不況克服へ 規制緩和と企業国際化の急速展開
  - 2001 エンロンの破たん
  - 2000～ 雇用不安など社会問題急拡大 企業の国際化急展開
- 2011年 東日本大震災・原発事故 そして年金問題と超額寸前の国家財政 急激な円高 政治の腐敗  
 日本経済の疲弊と格差拡大 企業の海外移転の急拡大  
 取り残りのなき日本に先行きが見えず 社会全体に広がる閉塞感・不安感

グローバル化 市場原理主義経済  
 効率化・国際競争力  
 劣勢のビッグバン後原資本主義へ  
 グローバル化の名のもとアメリカ中心  
 の特権に日本が飲み込まれてゆく

**現代の日本人に切々と訴えかけた 内橋 克人氏の「100年後へのメッセージ」**

NHK BSプレミアム 2011年12月18日(日) 放送 ↓

<http://www.ruijp/ruinet.html?f=200&c=400&m=259697> より採取採録

- 「日本人は一人一人が考え、しっかりと自分の足で立つことが出来なければ100年後も変わらない」
- 「戦前、戦後、お上に寄って立つ考えは変わっていない」 ↓
- 「人間が紙くすのよう捨てられる今の社会を変えなければいけない」 ↓
- 「市場原理至上主義経済から人間が主語である経済社会に変えなければいけない」 ↓
- 「日本人には賢さを伴った勇気が必要」 ↓

◎和鉄の道・Iron Road - 2012年の初めにより

内橋克人氏「100年後へのメッセージ」

<https://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2012年1月

厳しさを力に 経済評論家 内橋克人氏100年インタビューに共感して by Mutsu Nakanishi

<https://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/2012mutsu/fkobe1201.pdf>

参考添付 内橋克人 NHK BS 2011.12.18. 放送「内橋克人 100年インタビュー」視聴メモ

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2013年8月より

あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の解説を紹介

創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまし絵をダブらせ今一番自分 にずっと入る

<https://www.infokkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1308.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2013年9月より

新書 藻谷浩介・NHK広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介

今 日本で一番求められている地域を元気にする

日本再生への道「里山資本主義 & 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践

<https://www.infokkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1309.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2018年12月より

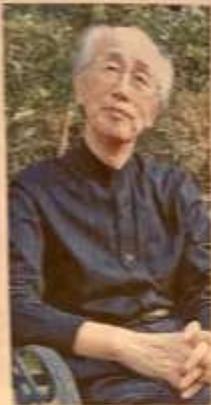
日本の行く先がおもいやられる師走 数が頼りの薄っぺらな社会からの脱出へ 若者たちへの思いが募る

こんな思いを代弁して、神戸新聞 内橋克人氏ほかの評論にも

<https://www.infokkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsu/fkobe1812uchihashi.pdf>

# 闘う主張 現場の声支えに

経済評論家・内橋克人さんを悼む 寄稿 金子勝 (立教大学大学院特任教授)



内橋克人(うちし・かつと)さん。1日死去。55歳→2014年撮影

## 新自由主義の流れに警鐘

議論が正しくて、現実が間違っていることではない。

内橋克人の仕事を思い起している神代と、私は思う。1990年代、バブルが崩壊し、日本経済が行き詰まり出した時、大胆な規制緩和と政策が声高に叫ばれた。規制緩和で市場競争を激かせれば、物価が下がって消費者の実質所得が上昇し、新しい産業が生まれるとわたりやすく説明された。この「新自由主義」のドグマはメディアも当然なこととして受け入れていった。

これに対し、内橋は断りに「規制緩和という競争」でアメリカの航空業界の実情を見ながら、安全性能をも軽視する規制緩和の問題点を鋭く告発した。そして、規制緩和を主張した経済学者たちに激突を立ち向かった。その後の結果は大を合せて、結果は内橋の主張通りになった。当時、私はそのを見ながら、セーフティーネットを組み立てていった。

しかし、ジャーナリストのころの仕事も、時代の流れは比較して、少しは立派なことに思える。時代に逆行しているのは事実だが、それには苦悶や悔いなどでも無い。孤立してでもトップダウンで内橋の姿勢を主張してきたのは、一は何だったか。

「議論が正しくて、現実が間違っていることではない。多くの人々が自分の主張を支えてくれるという確信ではなかったのか。70、80年代の『庶民の時代』シリーズを中心に、地域や中堅・中小企業の豊富な取材経験で培われた現場感覚から来ているのだろう。実際、内橋の著作が幅広く深い共感を生んだのは、地域や中小企業において、現実と格闘して生きている人々の心のひだにまで食い込んでいたからだ。

もちろん、内橋の魅力は現状批判の鋭さだけではない。未来を先取りして、代替的なビジョンを打ち出す著作をたくさん書いていた。内橋は、2011年の福島第一原発事故を見通すかのように80年に『原発への警鐘』を書いた。そして09年には『浪費なき成長 新しい経済の起點』を書いた。そこで環境問題にいち早く取り組み、「新自由主義」に代えて、北欧のデンマークモデルを紹介し、F(フーズ)、E(エネルギー)、C(ケア)を軸にして地域で雇用を創る新しい経済政策を打ち出した。私も、福島原発事故以後に、農業、自然エネルギー、福祉をベースにした地域分散ネットワーク型経済が、日本経済再生の突破口になると主張するようになった。たしかに内橋は先期的情報通達者だったが、私の主張は内橋の先駆的な仕事を踏まえたものである。結局、私は内橋の後を追いかけていただけなのかもしれない。

議論と現実の差額が進んでいる状況の下では、私がそうしてきたように、これから先も、現実と格闘してきた人々の心を揺さぶる内橋の仕事を追いかける者たちが生きつづけるには違いない。



現代の日本人に切々と訴えかけた 内橋 克人氏の「100年後へのメッセージ」

NHK.BSプレミアム 2011年12月18日(日) 放送

[日本人は賢さを伴った勇気を持って行動しよう! - るいネット \(rui.jp\)](http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=259697) 2011/12/19 より

<http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=259697> より採取採録

番組のエンディングでは、お一人で視聴者に切々と語り掛け、心のそこからの訴えでした

- 「日本人は一人一人が考え、しっかりと自分の足で立つことが出来なければ100年後も変わらない」
- 「戦前、戦後、お上に寄って立つ考えは変わっていない」
- 「人間が紙くすのように捨てられる今の社会を変えなければいけない」
- 「市場原理至上主義経済から人間が主語である経済社会に変えなければいけない」
- 「日本人には賢さを伴った勇気が必要」

内橋克人氏が出版されている著書〈1〉 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より抜粋

『原発への警鐘 (講談社文庫)』は1986年

『「会社本位主義」をどう超える新しい企業社会のパラダイム』は1992年

『隗より始めよ(カッパ・ホームス) 日本企業の生存条件』は1992年

『破綻か再生か日本経済への緊急提言』は1994年

『共生の大地 (岩波新書) 新しい経済がはじまる』は1995年

『経済学は誰のためにあるのか市場原理至上主義批判』は1997年

『規制緩和という悪夢』は2001年

『「人間復興」の経済を目指して』は2002年

『「共生経済」が始まる (NHK 人間講座) 競争原理を超えて』は2005年

『共生経済が始まる 世界恐慌を生き抜く道』は2009年

いち早く新しい時代への提言を書かれています。

参考 著書一部抜粋〈2〉 上記1)のリストと一部重複しています

『共生経済が始まる 世界恐慌を生き抜く道』内橋克人 朝日新聞出版 2009/3

『〈節度の経済学〉の時代 (朝日文庫) 階層化社会に抗して』内橋克人 朝日新聞 2006/05

『「共生経済」が始まる (NHK 人間講座) 競争原理を超えて』内橋克人 日本放送出版協会 2005/02

『「人間復興」の経済を目指して (朝日文庫)』城山三郎/内橋克人 朝日新聞 (城山三郎と対談) 2004/10

『〈節度の経済学〉の時代市場競争至上主義を超えて』内橋克人 朝日新聞 2003/12 |

『「人間復興」の経済を目指して』城山三郎/内橋克人 朝日新聞 2002/05 |

『規制緩和という悪夢 (文春文庫)』内橋克人/グループ2001 文藝春秋 2002/01

『破綻か再生か (講談社文庫) 日本経済への緊急提言』内橋克人 講談社 2001/11

『経済学は誰のためにあるのか市場原理至上主義批判』内橋克人 岩波書店 1997/07

『規制緩和という悪夢』内橋克人/グループ2001 文藝春秋

『共生の大地 (岩波新書) 新しい経済がはじまる』内橋克人 岩波書店 1995/03

『破綻か再生か日本経済への緊急提言』内橋克人 文藝春秋 1994/02

『隗より始めよ(カッパ・ホームス) 日本企業の生存条件』内橋克人 光文社 1993/11

『「会社本位主義」をどう超える新しい企業社会のパラダイム』内橋克人 東洋経済新報社 1992/06

『原発への警鐘 (講談社文庫)』内橋克人 講談社 1986/09

『新・匠の時代 (インターフェロンから核融合まで) 2』内橋克人 サンケイ 1982/02

『新・匠の時代 (「生命の海」を拓く) 1』内橋克人 サンケイ 1980/09

【 From Kobe 2012年1月 】

## 2012 年のはじめに 厳しさを力に

by Mutsu Nakanishi

2012 年が平和で穏やかな年であるように願っています



被災地だけでなく 日本の疲弊がますます露わに 人間復興・社会基盤の復興の両立を  
**「日本人気質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して 新しい日本作りに踏み出そう**

もう 気がつこう マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ

国際マネー主義から脱して 市場主語から人間主語へ

2011年12月18日 NHK BS 内橋克人 100年インタビューより

急激な高齢化社会が進む中 米国を中心とした体制の中で 国際マネーと市場経済に翻弄され続けた一年。

地方は疲弊し、政府は膨大な財政赤字に手を打てないまま、雇用不安と年金問題も深刻さを増す。

そんな閉塞感漂う日本に、東日本大震災と原発事故が追い討ちをかけ、後半には超円高がさらに不況と雇用不安を増す。

また、行き着くところまで来た破綻状態の財政赤字が先行き経済に大きいのしかかり、社会全体を揺さぶり続けている。

稚拙な政治は相変わらず、財界・金融と中央中心 人よりも市場・企業相手では難局克服の道が見えない。

「日本だけでなく 世界はどこも同じ????」と信じていたが、ふと気がつくと 景気のよい新興アジア諸国ばかりでなく  
ヨーロッパのドイツ・北欧諸国の好景気 そしてアメリカも景気回復基調にある。

「政府やマスコミは一般世論 われわれの感じている社会を代弁している」とはとても思えぬ中にある。

何のことはない一番おりを食っているのは日本。 さらに次は「円」が国際マネーの標的になる可能性があるという。

他人事のように思っていた非現実の厳しい現実が自分の目の前にひろがり、呆然と立ちすくんで、

ふと気がつけば、弱者の群れの中にいる自分。 そんな格差社会が猛烈な勢いの中でひろがっている。

そんな現実が被災地に浮き彫りされている。 社会の荒波の中にただ流されてゆくのみか・・・・・・。

考えて見れば、日ごろ見るテレビの中に広がる世界の薄っぺらなこと 何の理念も持たず、考える道筋すら放棄。

経済評論家内橋克人氏が警鐘を鳴らす「**頂点同調主義・熱狂的な等質化**」をあおっているだけではないのか・・と。

今年は この現実をなんとしても みんなで乗り越えてゆかねばならぬ厳しい一年である。

一番活力のあった「高度成長の時代」の中核を担い、今度は急速に進行する高齢化社会の中心にいる私たち団塊の世代には、

「本当に今の社会が腑に落ちない」「どこで どうボタンを掛け間違えたのか」

「でも なんとか 方策はないのか・・」と考えるのですが、「マスコミや政治の説く対応に対抗できる知恵を持ち合わせていない」のが悔しい。

昨年12月18日NHK BSで「匠の時代」の著者 経済評論家 内橋克人氏の「100年インタビュー」放送があった。

常々朝のNHK ラジオ 朝一番「ビジネス展望」の番組で 常に社会弱者に眼を向けつつ、現在の経済・社会矛盾をわかりやすく解説し、一番自分の考えにあっていると感じている人である。

約1時間半 戦後から現在まで 国際化の波に現れながら成長してきた日本経済・社会の光と影を時代を追って、本当にわかりやすく丁寧に解説指摘し、今これから われわれは何をすべきか・・・日本の未来に何が必要か・・・を提言。

テレビにかじりついて1時間 画面に移される図にデジカメを向け、メモを取りながら見入っていました。

決して高ぶらず、穏やかな語り口ながら、今の社会への強い怒りと悲しみが渦巻き、声を詰まらせ、日本や世界の現実への警鐘や将来のあり方を視聴者に切々と語り掛けた。

私には「我々 団塊の世代が抱いてきた『生き方への疑問』に丁寧に答えてもらった」という気がいっぱいでした。

最近 一番感激したインタビュー 経済番組でした。

放送前 何度か「100年インタビュー」の宣伝を見ましたので、通常のNHK番組のごとく 再放送があるかと思ったのですが、いまだに 再放送のスケジュールなし。意図的な何かがあるのかも・・・

内橋克人氏 NHK.BSプレミアム「100年インタビュー」2011年12月18日(日)

現代の日本人に切々と訴えかけた100年後へのメッセージ

- 「日本人は一人一人が考え、しっかりと自分の足で立つことが出来なければ100年後も変わらない」
- 「戦前、戦後、お上に寄って立つ考えは変わっていない・頂点同調主義・熱狂的な等質化」
- 「人間が紙くずのように捨てられる今の社会を変えなければいけない」
- 「市場原理至上主義経済から人間が主語である経済社会に変えなければいけない」
- 「日本人には賢さを伴った勇気が必要」

るいネット 勝寛舟氏 (徳島) のまとめ 日本人は賢さを伴った勇気を持って行動しよう!

<http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=259697>

番組を見てもらうのが筋なのですが、再放送がないので、内橋克人氏の思いを収めた私のデジカメ画像とメモをそのまま掲載させていただきます、本年 年始め 一年を送るいましめとしたいと思っています。

皆様にはいかが映るでしょうか・・・

下記は 1. 規制緩和と市場主義がもたらした企業収益の分配構造の変化 と 2. 今後の日本がとるべき道 一番私が知りたかった事の図面で、日本全国を本当にギスギスした本当に厳しい社会に変質させてしまった。

当時 財界・金融に迎合した政権の責任は思い。

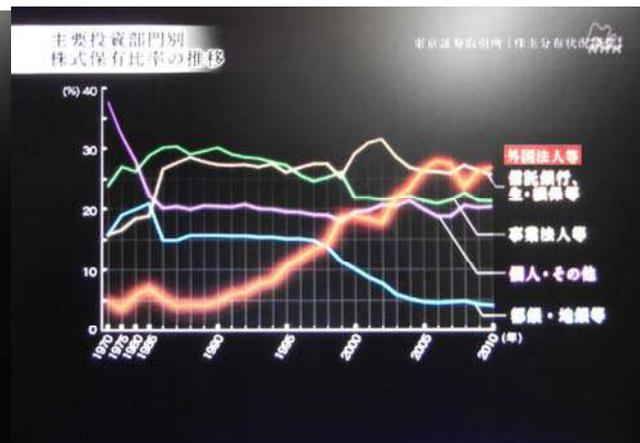
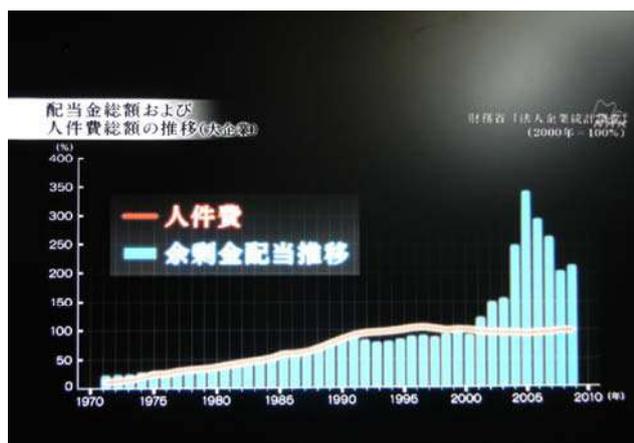
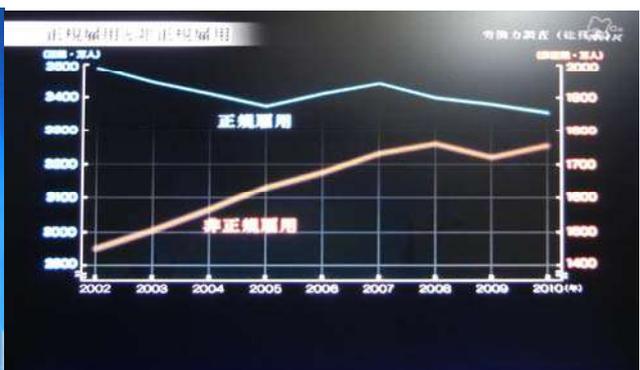
以下 私の 2011年12月 NHK BS 「内橋克人 100年インタビュー」の受け止めのまとめです。

## 1. 1900年代後半以降 国際競争・市場主義と規制緩和 が「働く」をどう変えたか

国際マネー資本主義経済に翻弄される日本が浮き彫りに

激烈な競争の導入と格差の増大 企業・金融は国家を超えてゆく

国益と国民益の乖離



経済成長期からずっと日本経済を支えてきた「富める者が富めば、貧しい者にも自然に富が浸透（トリクルダウン）する」とする「トリクルダウン効果」の枠組みは1990年後半から完全に崩れ去っている。2000年以降企業収益は国民に還元されず、海外へ流出している。国際企業の原理からは至極当然である。

したがって、国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策では日本国民の生活は安定化しないし、国・国民の復興はなしえない。企業は国境を超え成長 収益は株主・外国人投資家に。国益と国民益の乖離がいちじるしい。

努力しても報われない社会 一人の勝者のために99人が敗者の社会が進行しつつあることに強い怒り。

今 頂点同調では生活は守れない 自らの声を挙げよう

## 2. もうひとつの経済学「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の提唱

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済

これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる

国際企業・金融依存から脱し、日本の社会の自己矛盾の源 食糧・エネルギー・高齢化[介護・医療]の分野で

FEC 自立・自給圏経済 を構築してゆく以外に、新しい日本の道はない。



- 自給自立型農業の構築 「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村
- 自然・再生エネルギーでエネルギーの自立  
自給率数パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 地域住民による自給・自立の介護の機構 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業  
被災した釜石には自給圏構築が芽生えている



- 頂点同調から脱して声をあげよう
- 賢さを伴った勇気を  
市場主語から国民主語の自給圏経済構築へ

この内橋克人さんの話 震災を受けた東北の復興には町の核となる 神社と寺 そして文化(祭り?)の整備が欠かせないという「東北学」の赤坂憲雄氏の話 そして私のよく使う「縄文帰り-縄文人の知恵-」の話と根は一緒だと感じています。

戦後 日本が歩んだ道 NHK BS 2011.12.18. 「内橋克人100年インタビュー」より

- 戦争時代の反省 戦中・戦後 そして 今も続く社会構成の原点 日本人気質
  - 頂点同調主義
  - 熱狂的な等質化現象 リーダーにゆだねる・異を排する
- 1960年代 高度経済成長 頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長
  - 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上
  - 公害ほかの矛盾に蓋をした成長
  - ・ 生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発 独創性のなさが弱点
  - ・ 基礎技術・革新技術開発の遅れ

世界一の技術立国日本の謳歌 ⇔ 異を唱えられぬ日本の社会
- 1970年代後半 石油ショックによる原油価格の急騰 「狂乱物価」とインフレ・構造不況へ突入 >
  - 1974 第一次石油ショック・中東戦争 ・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト
  - 1979 第二次石油ショック・イラン革命 ・厳しい国際競争にさらされる
- 1985年～2008年 バブル経済とその終焉 不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代
  - 1986～ バブル景気 マネー資本主義の時代へ  
アメリカ型資本主義 株価至上主義
  - 1991 バブルの崩壊
- 1990年代～ 不況克服へ 規制緩和と企業国際化の急速展開
  - 2001 エンロンの破たん
  - 2000～ 雇用不安など社会問題急拡大 企業の国際化急展開

非正規雇用 外国人投資の急上昇
- 2011年 東日本大震災・原発事故 そして年金問題と破綻寸前の国家財政 急激な円高 政治の貧困  
日本経済の疲弊と格差拡大 企業の海外移転の急拡大  
舵取りのなき日本に先行きが見えず 社会全体に広がる閉塞感・不安感

グローバル化 市場原理主義経済  
効率化・国際競争力  
金融のビッグバン強欲資本主義へ  
グローバル化の名のもとアメリカ中心  
の枠組に日本が飲み込まれてゆく

[ 新しい日本 新しい経済学の構築 ]

賢さをともなった勇気を持って 頂点同調主義から脱出 市場主義から人間主語へ  
矛盾を解決することで成長を生む「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済の創生



- 理念型自給経済  
その芽はすでにある  
FEC 自給圏の創生
- 高知 馬路村 ゆずの生産・加工で30億円/年
- デンマーク 自然再生エネルギーで電力自給率数% →200%へ
- デンマーク 高齢者社会の拡大の中 介護・医療の市民・地域ビジネスの構築

参考 内橋克人 NHK BS 2011.12.18. 放送

「内橋克人 100年インタビュー」 視聴メモ by Mutsu Nakanishi

経済評論家 内橋克人 NHK 100年インタビュー-2011.12.18. の内容受け止め by Mutsu Nakanishi



日本が高度成長を達成し、  
技術立国日本を謳歌した時代から、  
技術立国にかげりが出始める時代・  
国際市場競争・金融の  
マネー資本主義の時代へ  
エンジンは頂点同調主義・熱狂的等質化現象  
戦中からの日本人像がそのまま引き継がれ、  
日本の経済成長の原動力になってゆく。  
幅の広い中産階級が形成され、国民は小市民意識に沸く  
国民益と国力が一致との幻想に浸る時代

国際化の波の中 経済立国日本に酔いしれ、その矛盾や実像に目を向けることなく輝く明日の日本を信じきっていた時代である  
日本人の特質 頂点同調主義・熱狂的等質化現象のもとで、高度成長を遂げ、それぞれが益を実感できた時代である  
1980年代 オイルショックとマネー資本主義の台頭・企業の厳しい国際競争激化の中で  
日本繁栄の時代はもろくも崩れ去り、厳しい現実にとらされる時代がやってきた。



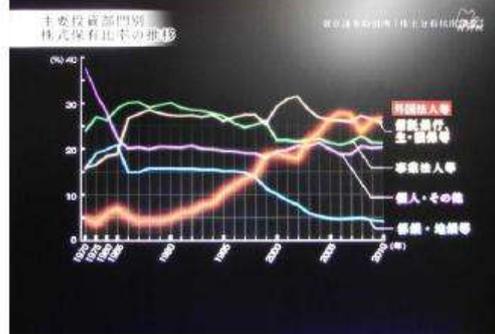
国際競争・市場主義と規制緩和  
マネー資本主義経済に  
翻弄される日本が浮き彫りに  
激的な競争の導入と格差の増大  
企業・金融は国家を超えてゆく  
国益と国民益の乖離





マネー資本主義 と ビッグバン・アプローチ  
強欲資本主義の席卷  
市場経済への移行は全面的かつ短期間のうちに実現されなければならないとする考え方  
頂点同調の日本、なすすべもなくIMFを中心とするアメリカの支配体制の中に組み込まれてしまった。  
[バックス アメリカーナ]

トリプルダウン効果  
「富める者が富めば、貧しい者にも自然に富が浸透(トリクルダウン)する」とする政治思想「金持ちを儲けさせれば貧乏人もおこぼれに与れる」と主張することから、「おこぼれ経済」とも通称される。  
この流れが閉ざされていることを法化無理したままで 規制緩和が進行し、社会不安・労働の変質が急速に進む



経済成長期からずっと日本経済を支えてきたトリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っている。  
2000年以降企業収益は国民に還元されず、海外へ流出している  
国際企業の原理からは至極当然であり、これに頼っても日本国民の生活は安定化しない  
今 頂点同調では生活は守れない  
自らの声を挙げよう

トリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っており、現在の国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策では国・国民の復興はなしえない。

震災 & 原発事故から見た日本



頂点同調にまかせると 震災復興の名を借りた 惨事便乗型資本主義の復興が進む危険  
淡路阪神地震でも見られた人不在の復興の推進 箱もの〔建物ほか〕・筋もの〔道路ほか〕

もうひとつの経済学「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の提唱

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済 これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる



トリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っており、国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策の中で 国民の閉塞感と不安感はぬぐえない。  
国際企業・金融依存から脱し、特に 現日本の社会の自己矛盾を生んできた源 食糧・エネルギー・高齢化〔介護・医療〕の分野で自立してゆく以外に、新しい日本構築の道はない。

- 自給自立型農業の構築  
「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村
- 自給率数パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業



「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の構築の実現は可能

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済 これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる



- 頂点同調から脱して声をあげよう
- 賢さを伴った勇気を 市場主語から国民主語の経済構築へ

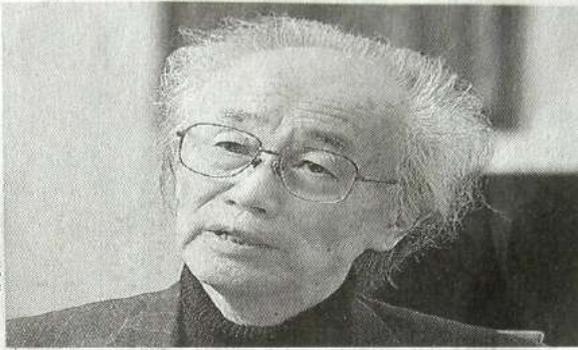
# 貧困の多数派 歯止めを

経済評論家 内橋 克人さん



—現代日本の問題点はどこにありますか。

「日本社会でも新たな階層が生まれてきている。国民皆年金など基礎的な社会保障からさえも排除された人たちが多数派となる『貧困マジョリティー』だ。グローバル化やマネー資本主義が進み、非正規雇用が増えて中間層が崩壊する社会の到来は、危険な時代への予兆ではないか」  
—貧困マジョリティー



うちはし・かつと 1932年生まれ。神戸新聞記者を経て経済評論家。90年代から一貫して市場原理至上主義、新自由主義的改革に警鐘を鳴らしてきた。主な著書に「悪夢のサイクル——ネオリバリズム循環」「共生経済が始まる」など。（相場郁朗撮影）

的に、極めて反射的に、表面的に評価して、選挙権を行使する。大阪市の橋下徹市長の『ハズム現象』も貧困マジョリティーの心情の瞬発力に支えられている面が大きい。『地方公務員は特別待遇を受けている』とバッシングし、閉塞状況下の欲求不満に応えていくやり方だ

「政治に対する閉塞感が国民の方向性を誤らせるという点ですか。」

「政治のリーダーシップ不足」と言われるが、民主政治を基盤とする国でのヒーロー待望論ほど異常なものはない。日本古来の『頂点同調主義』に加え、異議を唱える者を排除する『熱狂的等質化現象』が

「いまの政党政治は一挙に崩れる瀬戸際にある。今年には多くの国で政権交代が起き、政治的に極めて流動化する。グローバル化の流れは変わらぬ。市場原理主義のもとで、貧困マジョリティーを生み出す『貧困の装置化』が進んでいる。消費税増税によって、零細企業や地域経済を支えてきた地場産業は、価格転嫁できず

にコスト引き下げを迫られる。所得税なら稼いだ人がたくさん納めるが、日本型消費税は貧困マジョリティーを増幅させる『貧困の装置化』の手段になる」

「私は新たな基幹産業と『FEC自給圏』を提

定(TPP)についてはどうですか。

「これも同じ。米国の政権が代わっても、米シンクタンクは一貫して『投資の絶対的自由の保障』を求めてきた。日本がTPPに入れば、外資は日本政府を米国の経済法廷に訴えることができる。米企業はオーストラリアでの医薬品への公的補助さえ『自由市場に反する』と問題視している。日本の国民皆保険制度も目の敵にしているが、これは豊かな人も貧しい人も、ひとたび体を害せば医師にかかることができ、制度で、国民的財産、社会的共通資本だ。それが毀損され、一部企業のビジネスチャンスになる。弱いところ

に社会的変動の影響が収斂する」

「日本の政治は何を目指せばいいですか。」

「私は新たな基幹産業と『FEC自給圏』を提

唱してきた。FはFood s(食糧)。日本の穀物自給率は世界で124番目だが、食糧自給は国の自立条件で新たな産業も形成する。EはEnergy(エネルギー)。再生可能エネルギーとしてデンマークでは風力発電、太陽熱発電を推進し、エネルギー自給率が今では200%近い。日本は国策として原発に集中し、ほかの選択肢を排除した。CはCare(介護)。市場に任せるのではなく、社会による介護自給圏を形成すれば北欧諸国のように強力な産業になる」

「『うつつん晴らし政治』ではなく、世界のモデルに目を向け、食糧、介護、エネルギーの自給圏を志向すべきだ。地味でもいいから、グローバル化の中で、それに対抗できる『新たな経済』を作ることが本当の政治の役割だと思う」

（聞き手・園田耕司）

の特徴とは。「米国はじめ国内外の最強の秩序形成者に抵抗する力もなく、生活に追われて政治的な難題に真正面から対峙するゆとりもない。同時に、精神のバランスを維持するために『うつつん晴らし政治』を渴望する。政治の混乱を面白がり、自虐

体となる。『うつつん晴らし政治』の渴望を満たさずとすれば、1930年代の政治が繰り返される。グローバル化が生み出した『貧困ファシズム』の培地となりかねない」

「政治課題は山積しています。」

「政治課題は山積しています。」

「政治課題は山積しています。」

「政治課題は山積しています。」

「政治課題は山積しています。」

【From Kobe 2013年 8月】

## ひまわりの夏の便り



### あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

「NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の『働き方の多様化とは何か』解説」を紹介  
日本社会全体に言葉とはうらはら 創造性のない時代 異常気象にだまし絵をダブらせて

2013. 8. 1. by Mutsu Nakanishi from Kobe

一枚の絵が眺める人の心理状態によって 幾通りかの絵に見える絵を「だまし絵」といい、何回がこのだまし絵について触れたことがある。「即物的に見た」といっても その見た人の心理状態によって、見えているものの危うさによく注意せねばならぬと。

先日 高校時代の仲間が自分の研究中の「哲学」についての著書を送ってくれたのですが、そんな難しい本など歯がたためだろうなあ・・・と気楽に読みはじめたのですが、面白い。

「哲学」「心」というのは、「本能」といった一面的なものでなく 人が生きてきた過程の中で  
それぞれが作り上げたもの。したがって、「日本人の心」・「日本人の哲学」といっても 複層的なものとして捕らえるべきものだ。欧米の人の考え方も同じだ。

このことを頭に入れて思考することが大切と繰り返し数多くの事例を引いて述べられていた。

難しい内容は別にしてあれあれ・・・と。

「哲学って 揺るぎのない真理というか 確固たるひとつのもの」と思っていたのですが、そんなものか。

難しいものと思っていたのですが、案外私たちの身近な考えの中にあると気楽に思えたのは収穫。

また、「だまし絵」の見方と一緒になあ・・・と。

だまし絵をちらつかせての参議院選挙が終わって、自民党の圧勝。 また、政治の向かう価値観の急転が心配になる。小泉内閣の規制緩和・国際競争・グローバル化で一般庶民を窮地に追いやった人たちが、ブレーンとして復権し、 声高にアベノミックスを叫んでいるのにはもう沢山だと。

「だまし絵」を知っていて「見抜けなかった」と価値観を転換させた言い訳 言い逃れの隠れ蓑として、あまりにも多い「想定外」「経験したことがない」との勝手な納得。

これで物事を済ませてしまう風潮を作り出した人たちでないか・・・。

言葉の遊びで切り抜けてしまう創造力の欠如が、数を頼み、「スピードだ グローバルだ」と押し進んでゆく。

そんな累々とした失敗が、ここ数十年続き、ものづくり日本の遺産も働きもので勤勉な日本人の特質も見失い、格差の小さい社会もはや過去のものになってしまっ、そこには理念も信念もないセツナに縛られた弱肉強食の競争社会まっしぐらである。だまし討ちに会わぬ創造的な社会形成が今ほど必要なときはない。

「想定外や経験したことがないのは異常気象だけでない」

社会みんなが、そんな言葉で思考を停止していると思える最近の社会状況。

親方日の丸・グローバルな大企業や銀行・金融がわれわれの生活を守ってくれるのだろうか・・・。

きっちりとしたプログラムを打ちたてて創造的な展開を進めない日本は益々おかしくなるのではないか・・・

もう楽観的には見ておれぬところでのアベノミックス。「明日はわが身」が迫り来る。

「だまし絵」発想を打ち破らねば・・・。 さしずめ、それを見抜かねば・・・と。

そんなおり、7月16日早朝 NHKラジオ 朝一番 ビジネス展望 『働き方の多様化とは何か』

内橋克人さんのビジネス解説 実に明快分かりやすい解説に 私には一番すっと入ってくる話であるになるほどと。

◎ 多様な働き方・雇用・労働の多様化 「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う

◎ 正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。

「日本ではこれが、ごっちゃにされて 都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。

同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバル スタンドアが 非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、けっしてそんなことはない」と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎ 例えば、『オランダモデル』の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。

均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の2種類しか労働は存在しない。

まさにだまし絵のなぞ解き いつもながら 私には一番納得できる筋道である。

今や 技術力・ものづくりが群を抜いているなど幻想に過ぎなくなっている日本。

創造力のない目先だけの金融中心の効率・大量生産・使い捨て経営が日本の物づくり現場を打ち壊してきたのはもう否定できない事実である。もっとほかにやる道はなかったかと自答するのですが・・・

アベノミックスもまたぞろ そんな反省もないグループの復権に見えて仕方がないのは私だけか??。

皆さんにはどう見えているでしょうか・・・いずれにせよ、東京中心主義を脱却して 落ち着いた世に早くなってほしいものです。

参考1 昨年10月に全国を対象に実施された『今、日本人はどのような環境で働いているのか』調査ではパート・派遣などの非正規で働く人の数が、2043万人と、初めて2000万人を突破し、雇用全体に占める割合も38.2%、つまりほぼ4割程度に達していると聴く。

◎ 20年前に比べると、非正規で働く人の数は、ほぼ2倍にまで増えている。

◎ 正社員だった人が転職するとその内40%以上が非正規で働かざるを得なくなっている。

◎ 25歳～34歳の若者層では、3人に1人以上の人が非正社員である。

高校や大学を卒業する時の厳しい就職環境を引きずったまま、働き続けざるを得ない。

こんな状況で雇用不安を感じない人たちが・・・どんなグループだろうか・・・

政党公約だった非正規雇用をなくす方向は今やどこかで消えてしまっている。これもだまし絵だったのか・・・

「心の病 会社員 2割増」「心の病におびえて働く」

2013年8月22日朝日新聞 大阪朝刊 1面 & 3面記事より

**朝日新聞**

8月22日 木曜日

16-18.30面

前橋 青英 4-1日 大山 形  
山形 巻 東  
延岡 学園 2-0花 (群手)

## 心の病におびえて働く

### 「職場にばれたらクビかも」

「職場にばれたらクビかも」... 心の病におびえて働く... 職場にばれたらクビかも... 心の病におびえて働く... 職場にばれたらクビかも...

**あなたのストレス度は?**

あなたのストレス度は、どのくらい高いですか? (チェックしてください)

- 非常に高く、仕事に集中できない
- やや高く、仕事に集中しにくい
- 普通、仕事に集中できる
- やや低く、仕事に集中しやすい
- 非常に低く、仕事に集中しやすい

(上記新聞記事の判読できる大きさへの拡大版を下に掲載しています)

\*\*\*\*\* 「心の病 会社員 2割増」 \*\*\*\*\*

# 心の病 会社員 2割増

## リーマン後3年 本社推計

心の病にかかるサラリーマンが増えている。大企業の社員約1600万人が入る健康保険組合では受診数が2011年度までの3年間で2割増えた。仕事のストレスが原因となる病気が大半。08年のリーマン・ショック後の景気低迷で、企業のリストラが進み、雇用不安が広がったとの指摘が出ている。▼3面におびえて働く

**サラリーマンの心の病の受診件数が増えている**

健康組合に加入する働き手本人の、1千人あたりの延べ受診件数の合計。厚生労働省の「医療給付実態調査」をもとに推計

年度	心の病気	その他
08年度	235 (31%)	55%
09	258 (32%)	55%
10	277 (32%)	54%
11	280 (32%)	54%

## 「雇用不安」との指摘

厚生労働省がまとめた医療組合が相次ぎ、全体の加入者数は年々減っている。療養保険の利用状況調査から、働き手本人が心の病で、働き手本人が心の病で、通院や入院した件数をもとに、朝日新聞が推計した。財政難に陥り解散する健保を対象とした。

心の病による受診件数はリーマン・ショックのあった08年度は1千人あたり延べ235件だったが、3年後の11年度は同280件と19%増。心の病以外の病気が8割超を占める。世代別では40代が33%と最多で、30代も3割を超えている。20代と50代は10%台と少なく、働き盛りの年代で受診の多さが目立つ。

一方、中小企業の社員約2千万人が入る「協会けんぽ」加入者1千人あたりの受診件数も、比較できる09年度と比べ9%多かった。健保組合の方が増えた割合が大きいのは、中小より大企業の方が受診をうながす態勢が整っているためとみられる。

精神障害による労災認定の件数は、10年度以降年間300件を超す高水準。関西大の森岡孝二教授「企業が社会論は「リーマン後、正社員の間でもリストラによる雇用不安が広がった。人が減るなかで多くの働き手が長時間働き、過労とストレスが高まっている」とみている。(牧内昇平)

# 心の病におびえて働く

## 「職場にばれたらクビかも」

サラリーマンの心の病が増えているのは、長時間労働やリストラへの不安が、働き手をメンタルヘルス（心の健康）の不調に追い込んでいたため。本人によるケアはもちろん、上司や同僚が周囲の不調のサインを見逃さないことが大事だ。 ▼1面参照

介護施設で働く東京都内の40代男性は2年前、うつ病と診断された。前の職場で、上司から毎日「辞めてくれ」と言われ、同僚のミスも自分のせいとされた。疲れているのに眠れず、毎晩酒をあおった。合所で包丁を握って首にあてているのを、妻が泣きながら止めた。1年間の休職をへて今年3月、会社をやめた。4月に介護スタッフとして再就職したが、いままも精神科に月1回通院し、抗うつ薬を飲んでる。前の職場で上司から吐かれた場面を思い出し、1日に数回、気分が悪くなる。だが、職場では薬は飲めない。「うつ病の薬を飲んでることが職場にばれたら、クビになるかもしれない。いつもビクビクして働いてる」と語る。

サラリーマンの心の病が増えているのは、バブル経

### あなたのストレス度は？

- 非常にたくさん仕事をしなげなければならない
- 時間内に仕事を処理しきれない
- 一生懸命働かなければならない
- かなり注意を集中する必要がある
- 自分の部署内で意見のくい違いがある
- 自分の部署とほかの部署とはうまく合わない



東京医科大「職業性ストレス簡易調査票」から抜粋。中央労働災害防止協会のホームページで自己チェックできる  
[http://www.jisha.or.jp/web\\_chk/strs/index.html](http://www.jisha.or.jp/web_chk/strs/index.html)

済順後の1990年代から指摘する声もある。過去30年ほどの医療保険の利用状況を調べた神戸大学院の山岡順太郎研究員は「心の病の受診は90年代後半から増え、最近10年間で倍増した」と語る。

「自分の心と体との対話を、毎日心がけています」うつ病を抱えながら、NPO法人で働く千葉県の50代男性は語る。発症したのは、出版社で働いていた13年前。担当する雑誌や単行本の数が急に増え、毎日3時間ほど残業していた。帰宅後も仕事のイライラがおさまらず、不眠に悩まされた。病院で「抑うつ状態」と診断され、出版社を辞めた。3年間の自宅療養をほざ

心臓の病が増えていることについて、山本晴義・横浜労災病院勤務者メンタルヘルスセンター長は「心の病への理解が広がり、受診の心理的ハードルが低くなった面もある」と分析する。山本センター長によれば、ストレスゼロを目指す、運動や余暇の時間をとくり、ストレスを解消する習慣づくりが大切という。本人が不調に気づかない場合は、上司や同僚が不調のサインを見逃さないことが求められる。（牧昇昇）

7月16日早朝 NHKラジオ朝一番 ビジネス展望

### 『働き方の多様化とは何か』内橋克人 2013.7.16.

内橋克人さんのビジネス解説 実に明快分かりやすい解説に私には一番すっと入ってくる話になるほどと。

- ◎ 多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う
- ◎ 正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。「日本ではこれが、ごっちゃにされて 都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバルスタンダードが非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、けっしてそんなことはない」と

と欧米の具体的な事例をひいて言う。

- ◎ 例えば、『オランダモデル』の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。均等待遇の上立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の2種類しか労働は存在しない。

新書 藻谷浩介・NHK 広島取材班

## 「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介

今 日本で一番求められている地域を元気にする

日本再生への道「里山資本主義 & 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践

2013. 8. 25. By Mutsu Nakanishi

「今 一番素直に自分の頭に入る」社会・経済論として何度か紹介した経済評論家内橋克人氏の論。内橋克人氏の提案する「地域自立自給経済圏」と趣旨をほぼ同じくする「里山資本主義」の具体的な構築論ならびに着々と推進が進む地域実践例が、この文庫本「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」に記されていたので、ご紹介。

この本では「里山資本主義」の考え方や具体的な実践を「マネー資本主義」と対峙するのではなく、そのサブシステムとして構築推進することで、疲弊・過疎化から地方を再生し、日本経済変革の道が提案されています。

私の一番知りたかった具体的な地域自立自給経済圏の実践例をこの新書 藻谷浩介・NHK 広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」から、整理して紹介。



### ＜＜ 内橋克人氏の提案する「地域自立自給経済圏」 ＞＞

「グローバル化」「国際競争力」錦の御旗に大企業・大都市圏を中心とした中央集権的な「市場原理主義・金融マネー資本主義」「強欲資本主義」に警鐘を鳴らし続け、「市場主義から人間主語へ」の転換を求める内橋克人氏。

日本経済が大量生産・大量消費を前提とした量産効果に依存しているという弱点をいち早く指摘すると共に、「改革」が剥き出しの市場原理主義が社会的費用を弱者に転嫁しかねないと、アメリカ流の聖域なき構造改革に厳しく警鐘を鳴らし、「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済圏の創設を提唱する。

この自立自給経済圏とは F (フード) E (エネルギー) C (ケア) をそれぞれの地域で自給する。

食糧・エネルギー・介護を含めた人間関係の自給圏を作り、これらを地域における新しい「基幹産業」にまで発展させて、地域の活性化を実現しようという考え方である。

### 《内橋克人氏の提案する自立自給経済の創生》

【from Kobe 2012. 1. 1. <http://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf> より】

被災地だけでなく 日本の疲弊がますます露わに 人間復興・社会基盤の復興の両立を  
「日本人気質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して 新しい日本作りに踏み出そう  
もう 気がつこう マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ  
国際マネー主義から脱して 市場主語から人間主語へ

2011年12月18日 NHK BS 内橋克人 100年インタビューより

賢さをともなった勇気を持って 頂点同調主義から脱出 市場主義から人間主語へ  
矛盾を解決することで成長を生む「マネー資本主義」に対抗する自立自給経済の創生

日本では新政権が発足しても、「アベノミックス」・「TPP」・「原発の推進」など経済対策・東日本大震災復興事業ひとつをとっても 中央集権的一辺倒の方向は相も変わらず、いまだに大企業・中央中心的なアメリカ流の「マネー資本」一辺倒。「実感のある豊かな生活を実現してくれる」との確信を持つ人がどれだけいるだろうか・・・。

これら施策の果実を取り込んだごく一部のを除き、格差は日増しに増大し、地方の疲弊はますます進み、その中身実

態が次々と垣間見えるにつれ、自衛の道を模索しつつも、無責任な楽観主義と社会不安・無力感の間をさまよっている。

一方、特に震災地域の急速な生活復興や地方疲弊の脱却には 地域内での「マネー循環」が欠かせぬと思えるが、ここでも 地域外へのマネー流出を促す中央集権システムが顔を出しているという。

口で言うのはたやすいが、自立自給経済圏の創設の推進は難しい。なんとか 未来へつながる永続的な推進根業モデルが立ち上がらないと、これも絵に描いた餅になると・・・・・・。

まだ、日本の潮流にはなっていませんが、「マネー資本主義」から脱却した日本再生への新しいアプローチ道 が地方で始まっていることを記した **新書本 藻谷浩介・NHK 広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-**」を紹介。ご一読を。

2013. 8. 25. From Kobe by Mutsu Nakanishi

**新書 藻谷浩介・NHK 広島取材班**  
**「 里山資本主義 -日本経済は『安心の原理』で動く- 」**  
**内容 要約**

**1. 「里山主義」** (新書「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」表紙横帯より)

かつて人間が手を入れてきた休眠資産を再利用することで、原価0円からの経済再生、コミュニティ復活を果たす現象。安全保障と地域経済の自立をもたらし、不安・不満・不信のスパイラルを超える。危機を超え未来を生む、すり潰されない生き方の提案として登場。

**2. 里山主義による地域自立自給経済圏の実践を進める街の紹介**

**中国山地の山深いたたらの郷 岡山県真庭市と広島県庄原市 (西城)**

「里山資本主義」というネーミングに惹き付けられましたが、中国山地奥深い過疎地 岡山県真庭市やすぐ隣の広島県庄原市西城での **1. バイオマス発電を中心とした持続的な地域循環システム取組の話**や **2. 里山の雑木を燃料にした燃料効率のよい「エコストーブ」**が「ストーブ」にとどまらず、原価ゼロの暮らし」のアイデアを次々と生む。電気エネルギー消費の抑制や荒れ果てた農地・農業の再利用など地域自立の道を進める話。

- **真庭市の「バイオマス集積基地化」による地域持続型経済圏の推進**  
真庭市の製材企業から出る「原価ゼロの資源」木屑を燃料ペレットに変えて、バイオマス発電・家庭燃料など熱燃料としてペレットを使うことにより、「発電」「製材」「ペレットボイラー」「ペレット生産」など地場産業を興す。  
現在 真庭市の消費エネルギーの11%が木のエネルギーでまかなわれ、この数値はさらに上昇中  
地域の外へ金が流れ出るエネルギー収支が大幅改善し、地域活性化の源になっている。
- **庄原市西城 燃料効率95%を超える家庭用「エコストーブ」の開発による森林エネルギーによる化石エネルギーからの脱却と原価ゼロ資源利用・里山再発見発想の町づくり**

「バイオマス発電だけでは成立しないだろう」・「都会からやってきた人たちの気楽な田舎生活・スローライフの取り組みがしゃれた空気を街にふきこみはじめたのか・・・」などと懐疑的な目で読み始めたのですがさにあらず。ペレット燃料の徹底的な活用。雑木数本で燃焼するエコストーブの高性能ぶりには目を見張る。都市から供給されねばどうしようもないと思っていたエネルギーがサブシステムとして自立し増加の道をたどっている。

「原価ゼロの暮らしとして 里山を食い物にしよう」というアピール。  
この地の森林・製材から大量に出てくる原価ゼロ円の木屑などの資源をエネルギー資源に変える実践取り組みや、食料資源としての里山など、次々と実践アイデアを生みつつ、それが新たな産業・雇用を生んでゆく。  
地域内エネルギー自給をめざす取組を軸に地域自立への道とその仕組みが示されてゆく。  
過疎を逆手にとつての豊かな暮らしへ展開して行く取組が、行政も動かし、地域を変えてゆく。  
外部に頼らずとも、持続的なシステムが着実に地域の中で育ち、地域を自立経済県に変化させ、街を活性化する。  
こんな持続的な地域循環のシステムが過疎地に構築でき、地域を帰られる。それも 誰もが斜陽と思っている森・里山の資源を軸に・・・・。外部からの金・産業・インフラを投入せねば地方の過疎化は食い止められぬとの思い込みが一気

に打ち壊され、懐疑的だったのが、吹っ飛んで「こんな継続的なエネルギー地域循環システムができるのだ」と……。

この本では、これらの実践は「世界経済の最先端」だといい、「この中国山地の奥深い過疎に悩む山郷での実践は突発的なものでないという。

江戸時代隆盛を極めたこの中国山地の「たたら製鉄山」では、森・里山の資源を軸とした地域循環型の経済圏が100年以上持続して成立していた」ことを指摘する。そして、自立経済圏構築の継続性には「エネルギーの化石燃料からの転換」そして、「の森・里山のエネルギー資源の活用」に着目した構築がきわめて重要であると説く。

そういえば たたらの里の森林資源ばかりでなく、砂鉄をとるために切り崩した里山の跡地が牧場・棚田となって、鉄山とともに地域経済に寄与していったことなども頭に浮かんでくる。

日本伝統の匠の技術としてしか語られることがなくなった「たたら製鉄」。その仕組みにスポットライトが当てられ、21世紀型の新しい日本再生・「地域循環型自立経済圏」の構築実践モデルとして語られているのがうれしい。

中国山地のたたら郷 真庭市や庄原市（西城） その地域自立型エネルギーシステム構築を軸とした自立経済圏成功体験の底に「たたら製鉄 鉄山」があるという。

### 3. 海外にもある里山主義による地域自立自給経済圏の国「オーストリア」

オーストリアは日本と同じ急峻な山岳地帯を抱える国ながら、機械化された最先端の林業とペレット燃料を徹底利用したエネルギー政策に取り組む。

中でも国境の町・ギュッシング市では1990年にエネルギーの脱化石化を宣言し、木質バイオマスによる地域冷暖房やコジェネレーション発電によりエネルギー自立を実現させている。

しかし、バイオマス発電・ペレットなどはそもそも 本体の木材利用産業があつて、そこからの大量の「原価ゼロ資源の供給」があつてこそ成り立つ。

真庭・庄原の例にしても、現状「原価ゼロ資源木屑の供給」には限界があり、更なる広域地域経済圏の構築には「原価ゼロ資源木屑の供給」を可能とする「本体の木材利用」の産業の展開が不可欠。

国を挙げて「バイオマスによるエネルギー自立」を進めるオーストリアでは鉄筋コンクリートの強度に匹敵する建築木材として「集成製材」の利用を推進し、積極的に木造高層建築の推進に取り組む。

直角方向に張り合わせた集成材 CLT（クロス・ラミネイティッド・ティンバー）が無類の強度を発揮し、オーストリアやイギリスでは CLT を利用した 9 階建ての木造高層建築物まで登場しているという。

日本ではセメントが容易に入手できる日本で、今後木材の高層建築物への利用解禁されたとしても 一気に進むかどうかは未知数ではあるが、鉄筋コンクリートに代替できる木材の集成材が登場する時代にもなっている。

#### 《「木質バイオマスでエネルギー自立を実現したオーストリア」の安定な経済 2011 年》

- ・失業率 EU の中で最低の 4.2% ・一人当たりの名目 GDP 49688 ドル（世界 11 位）
- ・対国内投資額 前年比 3.2 倍の 101.6 億ユーロ 対外投資額 前年比 3.8 倍の 219.5 億ユーロ

この安定した経済をささえるのが、里山資本主義。

国を挙げて木材を徹底活用して経済自立することに取組み、その成果が上記の経済安定につながっている。

また、「脱原発」を憲法に記している国でもある。

日本では斜陽とみなされる林業・製材業には大型の先端機械設備などの先端技術が導入され、最新技術が支える先端産業となり、材木関連産業は今や国の重要な輸出産業。都市には木造の高層ビル建設が進み、街には バイオマス発電の電気も併用供給され、家庭には熱効率のよいペレットボイラーがすえつけられ、これらと共に新しい産業と雇用が次々と生まれているという。

- オーストリアの製材メーカー「マイヤーメルンホフ」社では年間 130 立方メートルの木材の供給し、製材・加工からバイオマスまで手がけ、町では熱水パイプラインが通り、年間 6 万トンというペレット工場も持ち、町では ペレットを快適に利用するオートメーションシステムが整っている。
- 「熱効率 90%を超えるペレットボイラー」今ペレットボイラーの普及が急速に進みつつあり、これを軸にバイオマス周辺産業が地場で急速に発展し、多くの雇用も生まれている。
- 森林伐採と永続的森資源の管理

「森林官と森林マイスター制度による徹底した森林保護・伐採の教育と林業実践」により、  
 林業は「持続可能な豊かさ」を守る術として バランスの取れた森林の伐採と植林が進む。  
 森林はオーストリア有数の外貨の稼ぎ手 木材関連産業で年間 30~40 億ユーロの貿易黒字  
 となっている

内陸国オーストリアでは、まだ エネルギー・電力を他国から輸入しているが、上記した木質バイオマスへの国を挙げての取組で、その輸入量も減じる方向にすすみ、「エネルギー自給」目前だという。

#### 4. 里山資本主義に基づく地域循環型経済取組の広がり紹介

**地域の価値に気づき 地域に根ざした活動が違った価値を付け、広がってゆく**

**売れる秘密は「原料を高く買い 人手をかける」 そんなオンリーワン価値も生まれているという**

- 山口県周防大島の地場産業の果樹農業を活かしたジャム園の経営  
 自分も地域も利益をあげる街に眠るアイデア・技術の掘り起こしによるオンリーワン化のジャム作り
- 高知県大豊町の真庭モデル導入の試み  
 高知県は地域収支を見ると林業は黒字なのに製材業は赤字。そしてエネルギーは圧倒的な赤。  
 これを改善する取り組みで地域を掘り起こす。
- 島根県の耕作放棄地を活用した放牧の取組  
 食料自給率 39%の日本にひろがる膨大な耕作放棄地 この方基地の活用  
 ヨーロッパでは 整然と整備された草場が美しい田舎の景観を作っているのに、日本では雑草生い茂る  
 荒地化が進む。この差はなぜか・・・不思議でしたが、牛の放牧が勝手に荒地を草原に替えてくれることを数年前に知りました。 この島根県の取組も遊休地での自然放牧が新しい価値を生む。
- 島根県邑南町の移住女性による「耕すシェフ」レストラン。  
 外へ市場を求めず、地域で食す 楽しみが新しい価値を生む
- 鳥取県八頭町のホンモロコの養殖も耕作放棄地を活用した取組  
 遊休地に里山にある水を引いて、商品価値のある「ホンモロコ」を育てる。

#### 5. まとめに変えて 地域収支から見える持続自立型経済圏創設への取組

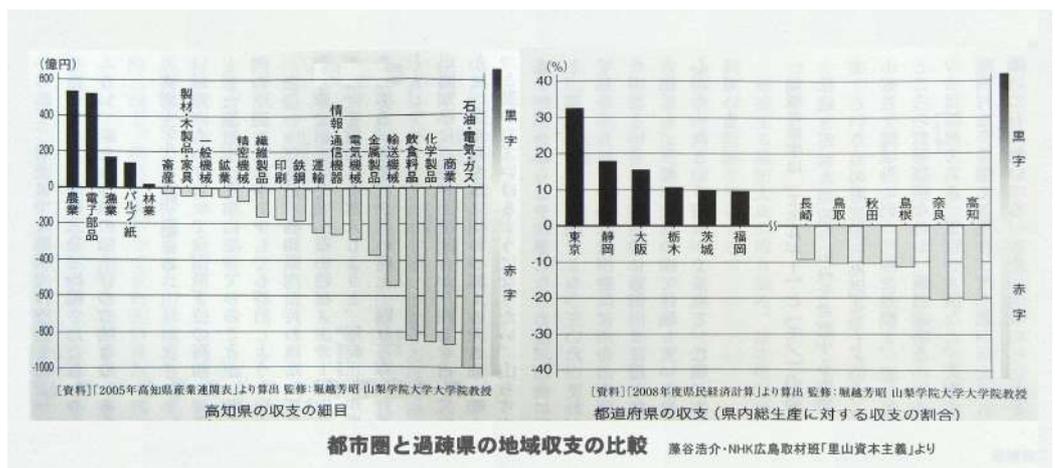
新書「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」はこの後 下記のような項がつづいている。

- 里山資本主義の延長戦にある「無縁社会」の克服 取組み
- 「スマートシティ」のシステム構築を検討する最先端プロジェクト  
 最先端の取組は里山資本主義の取組と驚くほど一致している
- 結び 里山資本主義の爽やかな風が吹き抜ける、2060 年の日本

私の一番興味があった里山資本主義の実践活動の具体的な紹介もほぼ済んだので、今回はここで私の紹介の終わりにしたい。ご興味のある方は ぜひ 「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の本で。

この本に書かれた内容は中央集権的「マネー資本主義」に警鐘を鳴らし続け、日本再生・地方再生の道を「自立経済圏創生」であると説く内橋克人氏の経済論と同根・共通で、力強く地方再生の道を進む地域が具体的に示されている。

右の図は「里山資本主義」の本に掲載されていた都市圏と過疎地の地域収支のグラフ。  
 都市圏と地方とで、地域収支の差が大きく、しかも 地域自立にはエネルギー・食料の収支改善そして強みとして農業・漁業・林業など地場産業の地域循環型産業



としての新しい取り込み展開視点が必要なことがよく分かる。

これに 今直面している「医療」を加えれば、まさに 内橋勝人氏がいう食糧・エネルギー・介護を含めた人間関係の自給圏を作り、これらを地域における新しい「基幹産業」に育てる CFE 自給圏の創設そのもの。

今までなにか始めても すぐ国や大企業など中央に飲み込まれてしまいそうで、地方自立の立ち行く道に懐疑的でしたが、具体的な実践取組みが始まり、また、インターネットに書かれている自立取組例の記事を色々読むと地方の行政が、今までの取組とは別に この里山主義の実践取組に気づきはじめ、新しい取組が始まっていることも知りました。

地産・地消さらに地方へ行って 観光・食事そして物産を買う楽しみにも。

ちょっとですが、地域を眺める目が深まりました。

地方が武器を持ち始めて新しい道を展開する。日本の先が明るく見えてくるにうれしい限り。

新しい日本再生の鼓動がそれぞれの特質を生かし、地に足が着いたオープンな取組がいたるところで生まれれば、それが地方分権・地方再生そして東北再生への道へとつながってゆく。

政治家の選挙戦で見る地方分権論とは違う草の根地方分権論でもあると。

また、私の知る山深いたたらりの里の取組みが紹介され、それもこの里山主義が示す地域自立型経済圏として、たたら製鉄の遺産が紹介されていたのもうれしくなりました。

そんな新書 また、私の好きな内橋勝人氏の経済論に実践の道がついているのもうれしい。

ぜひ一読を。

2013. 8. 25. from Kobe by Mutsu Nakanishi



中国山地 たたら製鉄 鉄穴流しが作った棚田の景観 右の写真は牛が放牧された休耕田

## 【参考】

### 1. From Kobe 2012. 1. 1. 内橋克人氏 100年インタビュー抜粋

被災地だけでなく 日本の疲弊がますます露わに 人間復興・社会基盤の復興の両立を  
「日本人氣質の奥にある頂点同調・熱狂的な等質化から脱して 新しい日本作りに踏み出そう  
もう 気がつこう マスコミが騒ぎ立てる働かせる側の論理から働く人の論理へ  
国際マネー主義から脱して 市場主語から人間主語へ

2011年12月18日 NHK BS 内橋克人 100年インタビューより

<http://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf>

### 2. From Kobe 2013年8月 あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮 創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまし絵をダブらせ今一番自分にずっと入る

NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の解説を紹介

<http://www.infokkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1308.pdf>

# 【From Kobe 12月】収録

## 日本の行く先がおもしろい師走

## 数が頼りの薄っぺらな社会からの脱出へ 若者たちへの思いが募る

## こんな思いを代弁して、神戸新聞 内橋克人氏ほかの評論にも

夏日まで飛び出す異常気象の中で迎える師走 なにか無力感ばかりがただよう12月のはじまり。

気象ばかりでなく、世の中の動きまでもがおかしい昨今、

日本はこれからどうなってゆくのだろうか。。。。。

現実には蓋をして、強がりばかり言っても、相手は見向きもしてくれず、ばらまく金もいよいよ底をつく。

想定外では済まされぬ激動の地球環境に国土はぼろぼろ。産業構造は大きく変化し、技術力も技術立国も昔の幻影 国を支え、生産を担う若者の姿もまた幻影。急激に高齢化社会 そして格差社会が進行中。

でも 不平不満の現実を眼をそらし、我が身を守ることに精一杯。

「明日は我が身」におびえながらも、今を追う。付け焼刃の取り繕いの取組ではどうにもならぬ日本の現実。

数が頼りの日本 政企業も官僚も日本の実態・現実をしっかりと見定めよ。

日本はこれから、今成長期を迎える国々とどのように組して行くのだろうか。。。。。

とはいえ ぶつぶつ言っても 所詮 こちらも 打つ手を持たぬ後期高齢者。

成功体験 仲間意識にしがみついて「想定外」「付けを自己責任」と他人に付けを回して知らぬ顔 そんな老害リーダーに興味なし。若者たちの新しい国づくりに託して、若者たちに託す。

11月29日神戸新聞 「針路21」欄に誰にも言えぬそんな思いをすかっと切りだす内橋克人氏の評論が掲載されているので、From Kobe 毎月のぶつぶつに変えて、ご紹介。

皆様には どううつるでしょうか。。。。

来年は新しい若者の時代元年に舵を切ってほしい。

老害者たちは早くリタイヤせよとひとりぶつぶつ。

### 2018. 11. 29. 神戸新聞(1・2面掲載)

### 「針路21」欄 内橋克人氏評論 整理転載

### 「安倍外交」の実相

## 針路21

議員論説委員  
内橋 克人



## 目立つ内外の食い違い

## 針路21

## 国を危うくする言い繕い

時の政権にとって「首脳会談」は効果絶大なパフォーマンスの場である。安倍首相とトランプ大統領との会談はすでに一回、ブーナス大統領とは向い合ふ。

各国トップと親しげに握手を交わすシーンは国民の目撃できなければならない。「外交の安倍」がより広まる。米国民はトランプの演説の成否は支持率に響く。

その安倍外交に際して三つの特徴がある。まず「即会談」で何話し合われ、何が合意されたのか、会談後に明らかされる面談の発表に違いが目立つことだ。日米通商交渉で「TAA」をめぐるトランプ氏の会談。北方領土問題で「TAA」の輸出に反対した安倍首相の会談。9月末、国連総会後の記者会見でトランプ氏は「日本は素晴らしい防衛装備品を来週から買うことになった」と明かした。が、安倍首相自身「まだ断って話さず、だ。第三に国で重要法案審議中であつて、お構いなく足しげく海外に向く。経済界葛藤の大集団が、お供。する。「外交の安倍」は何を生んだのか。冷静な態度が求められる時がきている。

国会の首相室に合せて事前、事前に新しい「星」を顔がわり出される。森友・加計問題では公文書管理で捏造された。同じ手法の「裏合わせ」が、閣議録の場で解明すれば、日本という国の信用が揺れかねない。いま話題の「日米通商交渉」は「TAA」の「TAA」なのか、それとも「自由貿易協定」(FTA)を指すのか、日米間で決まる認識差が顕著だ。

「TAA」は「自由貿易協定」(FTA)を指すのか、日米間で決まる認識差が顕著だ。

唯一の例外規定が「TAA」なのであり、筆者は10月26日(日本時間)27日未明の「嵐」の嵐からその指摘をした(NHKラジオ、農林部11月1日など)。A P通信はその日のうちに「FTA交渉で日本側」と報じている。自動車への高関税撤廃の発動がトランプ師(「TAA」)の手裏剣だったことだ。

まずは「TAA」、次いで「FTA」国内世論対策を重視し、とする安倍外交の一段階分断式である。日本側で「食い違いあり」とみせ、その美、ひそかに「合意」が形成されている、と官報筋は筆者に明かした。農産物の大幅譲歩はもはや既成事実だ。

こうした「食い違い」はブーナス大統領の記者会見においても顕著だった。

### 「安倍外交」の実相 針路21

空虚な言葉が氾濫する社会 今を感じる違和感を作品に

空虚な言葉が氾濫する社会

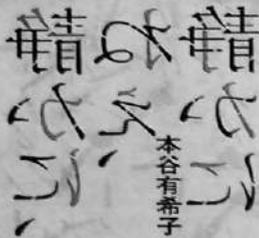
「旅の最中はキャーキャー楽しんでたので、一緒だった友人はショックを受けたみたい」と語る本谷有希子さん



きつかけは昨年、友人と行った海外旅行だった。期待した街の雰囲気と違ふ。友人ともぎょしゃくする。陰湿なムードなのに、スマートフォンで撮った写真は楽しげだ。
「写真を見返しているときに、写らない場面でもポーズとか取って楽しそう。空っぽだっけ分かってるんだけど自分の脳内に快樂物質みたいなものが出ていて楽しい」
2016年2月の芥川賞受賞後、作家の本谷有希子さんは、作家の本谷有希子さん 会員制交流サイト(SNS)
40歳目前のハネケンは友人のヤマコ、づちちゃんとマレーシアに向かう。常にスマホで自分たちを撮影してすぐさま

本谷有希子さん新著

今感じる違和感を作品に



で共有し、一緒にいるのにLINE(ライン)でも話す3人。旅でのちょっとしたトラブルや不快な要素が写真に写り込んだら削除する。深刻な危機が近づいてもラインでのんきに会話するだけ。
「見たくない現実が大きいほど、逃避する力も巨大になる。そのエネルギーを書き込んだ」
SNSに執着する3人とも仕事は不安定で貧しく、年齢も直視しない。ハネケンは「友人と楽しいことをシェアしたり、嫌なことにウケたりすることで、現実を僕ら

なりのいい感じに編集していいける」と強がる。痛々しい彼らを本谷さんは執拗に描く。「どこかで自分だと思つて冷やかに罵詈雑言を見ているから、容赦なく突き放して書ける」
ニュースで報じられる、事件や災害で亡くなった人のラインのやりとりへの違和感もヒントになった。「生死に関わる文面でもあつたらかんと明るくて、ネガティブなムードを持ち込ませない。送信の音も間抜けで全てのシリアスを除外する」
それでもラインは多くの人の中心だ。陰のない、明るく空虚な言葉ばかりが氾濫する私たちの社会。誰でも思わず「静かに、ねえ、静かに」と

言いたくなるだろう。収録された3作に共通するのは「持たざる者」のイメージだ。短編「でぶのハッピーバースデー」に登場するのは職を失ったばかりの夫婦。クリスマスパティーのプレゼント交換に、夫は「なんの関係があるんだよ?」「そんなことが俺達の人生に」と怒る。滑稽でもの悲しい彼らの姿は、他人の記念日をSNSでのでき見る、私たち自身のいびつさのようだ。
SNSに警鐘を鳴らしたのではなく、社会のありのままを描いたただだと本谷さん。
「私の違和感すら1年後にはまひしていく。少しでもおかしいと感ぜられるうちに作品にしておきたかった」

文化情報

アジア図書館協会 「あなたも留めてみませんか」ベトナム語一日入門(言葉と文化) 19日19時、大阪市東淀川区淡路5の同図書館。ベトナムからの留学生が増える中、ベトナムを理解するのが狙い。講師はベトナム出身のグエン・ティ・フエン・チャンさん。言葉や文化などを紹介する。1300円。定員20人(要電話予約)。同館 ☎06・66321・10309

ご興味くだされば、上記の記事 記サイトにもありますので 拡大してご覧ください。